

沖縄県・西表島のカヌーツアーについて

川 窪 広 明

要 旨

1990年代からわが国でも、自然保護と観光産業の永続的な成立を目的とした「エコツーリズム」という考え方が提唱されている。沖縄県・西表島は、わが国初のエコツーリズム協会が設立された島であり、近年、亜熱帯林の中を流れる河川をカヌーで回るツアーが盛んになっている。本研究では、2004年と2006年にカヌーツアー参加者の意識調査を中心するヒアリングとアンケート調査を行い、カヌーツアーとエコツーリズムとの関連性について考察を行った。

その結果、参加者にはエコツーリズムという言葉を知らない者が多く、たとえ言葉は知っていてもエコツーリズム推進団体が提唱している「訪問先の自然環境を破壊することなく、その土地特有の自然・生活文化などの資源を持続させていくような旅行の概念」、「地域への経済還元を同時に成立させる新しい旅の形態」という内容について理解していないことがわかった。また、調査に協力いただいたカヌーツアーショップ経営者も、カヌーツアーについては「エコツーリズムではない」という意識を持っていることがわかった。

キーワード：カヌー、エコツーリズム、環境資産、環境問題

1. はじめに

日本には自然を環境資産とした観光が数多くある。しかし、観光を産業として繁栄させようとするれば、自然を傷つけることになる。かといって自然を守るために観光客を入れないようにするならば、産業として成立しない。このような矛盾を解決する方法として、1990年代から、わが国でも「エコツーリズム」という考え方が提案され始めた。エ

コツーリズムという言葉については、個人や団体によって異なった見解が示されているが、わが国では一般的に「環境（自然）に優しい観光」と認識されることが多いようである。またエコツーリズムは、観光と環境保護を両立させる手法として観光業界からも注目されているようで、各地で「エコツーリズム」と銘打たれたツアーが実施されており、今後も増えていくと考えられている。

本研究では、1996年に我が国初のエコツーリズム協会として「西表島エコツーリズム協会」が設立された西表島におけるエコツーリズムの状況を調べるとともに、特に近年参加者が急増している西表島随一の観光スポット・ピナイサーラの滝へのカヌーツアー参加者に対してエコツーリズムへの関心や意識についてアンケート調査とヒアリングを行った。さらにツアーに同行して実態調査を行い、カヌーツアーの現状や問題点について考察した。

2. 西表島の概要

西表島は、沖縄県南西に位置する八重山諸島（図1）の中にある面積約289万平方メートルの島で、沖縄県では沖縄本島に次ぐ広さである。行政的には八重山郡竹富町に含まれ、人口は、2,249人（2005年1月現在）である。島の周囲にはサンゴ礁が発達しており、中央部は亜熱帯照葉樹林に覆われた山岳地帯となっている。また西表島は大小約40の河川を有し、特に浦内川と仲間川の河口には広大なマングローブ林が広がっている。

西表島の集落は海岸線に沿って並んでおり、南西端の白浜集落から南東端の豊原集落まで約50kmの周回道路で結ばれている。集落の配置は、上原港を中心とした西部地区



(図1) 八重山諸島の構成

と大原港を中心とした東部地区に二分することができ、西部と東部の間の北海岸沿い約25kmにはほとんど住民がいない。産業としては、サトウキビ、パイナップル、水稲などの農業に加え、近年は肉用牛の生産が盛んである。またサンゴ礁の海や亜熱帯林などの自然や、国の重要無形文化財に指定されている節祭（シチ）をはじめとする伝統行事などの環境資源に恵まれているため、観光産業も盛んである。

西表島の歴史は古く、8～9世紀には既に集落が作られていたと考えられている。古くは所乃島（そないじま）、古見島（こみじま）などと呼ばれており、西表島と呼ばれるようになったのは18世紀頃からである。1609年の薩摩藩による琉球王国征服後、寄人（よせびと）制度^{注1)}による強制移住が行われたが、過酷な人頭税とマラリア禍^{注2)}によって多くの集落が廃村へと追いやられた。19世紀半ばに石炭が発見されたことから、明治以降は本格的な石炭採掘が始まり、囚人や県内外、中国人、台湾人の労働者が数多く従事した。炭鉱での労働は過酷な強制労働であった。¹⁾

近代に入ってから移住者による集落建設が続けられたが、やはりマラリアによって廃村となる集落が後を絶たなかった。特に1945年（昭和20年）はマラリアが最も猛威を振った年で、八重山諸島の人口の51%が罹患し死者は3,600人に達したといわれている。マラリアが米軍による DDT 散布により根絶されたのは1962年（昭和37年）になってからのことである。マラリア根絶後、1965年に戸川幸夫氏によってイリオモテヤマネコが発見されてからは、島の東西を結ぶ周回道路建設や港湾整備などが進み、観光化が加速されるようになった。

3. エコツーリズムの定義

エコツーリズムという言葉の誕生にはさまざまな説があるが、1988年にメキシコのヘクターセバロス＝ラスキュレインによって Turismo Ecologico という単語が作られたのが起源という説が有力である。²⁾ Turismo Ecologico というのは、スペイン語で旅を意味する Turismo と環境を意味する Ecologico の複合語で、言葉通り訳すると「環境と生物との相互関係を調べる学問のための旅行」、一般的には「環境にやさしい観光」となる。現在、世界中で多くのエコツーリズムに関連した団体が活動している。それらの団体が、エコツーリズムに対して統一された定義を提唱しているわけではないが、共通した内容として次の三つがあげられる。

- ①エコツーリズムは自然に基づいた（自然環境のもとで行われる）活動である。
- ②教育的・解説的な要素を含んだ活動である。
- ③持続可能な方法で管理・運営される必要がある。

例えば、エコツーリズム先進国といわれているオーストラリアのオーストラリア・エコツーリズム協会（EAA）は、「エコツーリズムとは、生態系において持続可能であり、環境や文化に対する理解を深め、感謝の念や保護の意識を生み出すツーリズムである³⁾」としている。すなわち自然や文化を学習し、保護や意識を高めるための体験学習の場であると考えられており、エコツーリズムの成熟を長いスパンで考えているように思う。

わが国の環境省と国土交通省によるエコツーリズムの定義は次のとおりである。

(1) 環境省

世界にも稀なほどに多様な自然を有するわが国の各地域固有の自然と、その中で生活する地域住民と自然との関わりから生まれた文化資源について、それらとの接し方を含めてガイドを提供し、旅行者が地域の自然・文化への深い理解を得るとともに、自然保護意識の高揚や人間形成を図ることができるような旅行。さらにその活動による環境に対する影響を最小限にとどめ、かつその収益が地域の環境保護のために貢献する仕組みを持つ旅行⁴⁾。

(2) 国土交通省

特に、観光による文化や自然環境に関する教養の向上、観光による地域の文化や自然環境の保全に対する貢献等の面に重点を置きつつ、文化や自然環境等の観光資源が良く保存された地域において、受入地域と観光産業が相互に連携して、観光と環境がバランスよく調和した新しい旅行形態⁵⁾。

両省の考え方として、環境省が観光客の自然に関する学習意識向上を通して、環境保護に役立てようというものに対し、国土交通省は、文化や自然を保護することで観光産業として地域振興に役立てようという点に微妙な違いを感じる。すなわち前者は環境資源を使った環境保護のための手段としてのエコツーリズム、後者は環境資源を使った地域振興のための手段としてのエコツーリズムと定義していると考えられる。

またNPO法人・日本エコツーリズム協会が定めた定義は次のとおりである。⁶⁾

- ①自然・歴史・文化など地域固有の資源を生かした観光を成立させること。
- ②観光によってそれらの資源が損なわれることがないように、適切な管理に基づく保護・保全をはかること。
- ③地域資源の健全な存続による地域経済への波及効果が実現することをねらいとする、資源の保護+観光業の成立+地域振興の融合をめざす観光の考え方である。それにより、旅行者に魅力的な地域資源とのふれあいの機会が永続的に提供され、地域の暮ら

しが安定し、資源が守られていくことを目的とする。

この考え方によると、エコツーリズムは「資源をもとに観光させること」により「観光で損なわれることがないよう保護」しつつも「それにより、地域に経済活動が起こること」を目的とした活動となる。ここで示されている「地域経済への波及効果」は、環境省、国土交通省をはじめ、日本におけるエコツーリズム団体による定義に多く見られる。次に示す西表島エコツーリズム協会のパンフレットにも同様な記述が見られる。

エコツーリズムとは、訪問先の自然環境を破壊することなく、その土地特有の自然・生活文化などの資源を持続させていくような旅行の概念です。“エコロジカルなツーリズム”を意味する言葉として、20年ほど前から欧米の若者たちのあいだで使われるようになりました。今では自然保護と観光、そして地域への経済還元を同時に成立させる新しい旅として、世界的に注目されています。

さらに旅行業者の団体である（社）日本旅行業協会（JATA）発行の「JATA エコツーリズムハンドブック」では、エコツーリズムを「商品」として売り出す観点から、①旅行者の教育、②絶滅に瀕した動植物の保護、③文化・歴史的環境保全への貢献、④専門ガイドの利用、⑤地元社会の利益、⑥ゴミの削減と最小限のインパクトの条件のうち1つが入っている自然観察主体のツアーで、環境への悪影響が最小に押さえられる努力が示され、訪問先に経済的社会的な貢献があれば、そのツアーをエコツーリズムと呼ぶとしている。⁸⁾

4. 研究の方法

4-1 西表島の観光入域者に関する分析

竹富町のホームページ (<http://www.taketomi-islands.jp>) には、1996年から2006年までの竹富町各島の観光入域者数に関する興味深いデータが記載されている。特に平成8年からは、月毎のデータが示されている。このデータを元に西表島をはじめとする離島への観光客の訪問時期について分析を行った。

4-2 西表島のカヌーツアーに関する調査

2004年と2006年に西表島でカヌーツアーを主催する業者の元で参加者に対しアンケート調査とヒアリングを行った。さらにツアーに数回同行し、ツアーの内容や運営方法について観察を行った。2004年は、村田自然塾（西表島西部上原地区）において7月26日より8月26日まで32日間、また2006年は、風車（西表島西部船浦地区）において7月30

日より8月30日まで32日間の調査を行った。

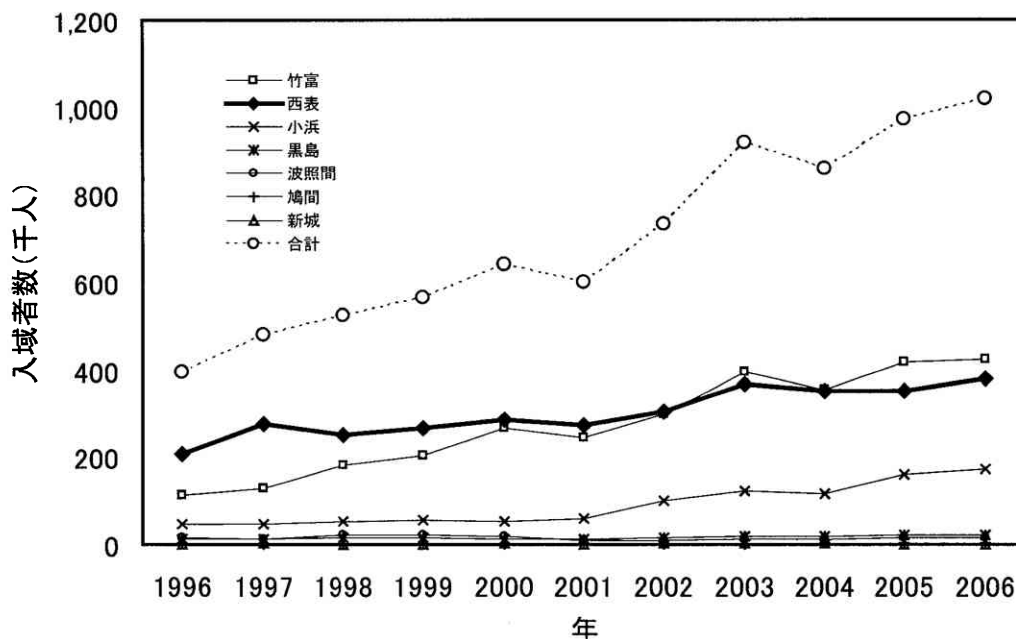
村田自然塾は、約30年前に大阪から西表島に移り住んだ村田行（すすむ）氏が西表島の山岳地帯を徒歩で回るツアーを目的に設立したもので、西表島の自然ガイド業としては最も歴史があるショップのひとつである。一方、風車は1998年に広島から西表島に移り住んだ大谷修一氏が設立した。しかし、村田自然塾がカヌーツアーを開始したのは、風車と同時期であり、カヌーツアー業としてのキャリアはほぼ同じ長さである。

ツアー参加者に対して実施したアンケート内容は、①参加者のプロフィール、②今回の旅行計画、③今回のツアー計画、④西表島に関する事前学習、⑤エコツーリズムに関する意識の6項目である。アンケート調査はツアー終了後に行い、アンケートを補充する意味でツアーの印象や感想などについてヒアリングも行った。

5. 結果

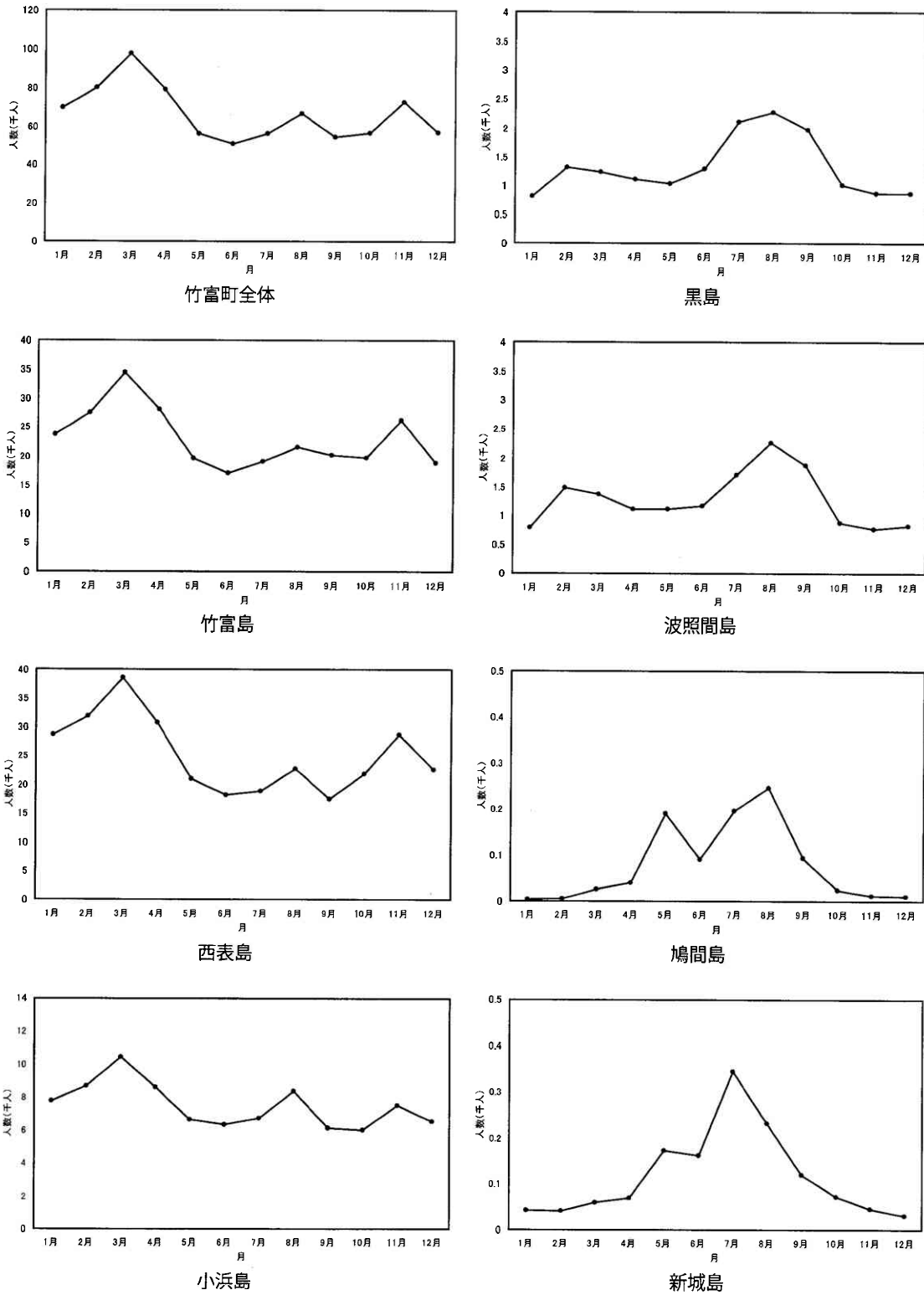
5-1 西表島の観光入域者に関する分析

1996年から2006年までの11年間における竹富町に所属する竹富島、西表島、小浜島、黒島、波照間島、鳩間島、新城島の7島の観光入域者総数と島別の観光入域者数の推移を図2に示す。また図3は、島別および竹富町全体（7島合計）の11年間における月別入域者数を示すグラフ観光入域者総数を示すものである。さらに西表島については、西部地区と東部地区の観光入域者数データがあり、図4に各年における月別の入域者数を示す。

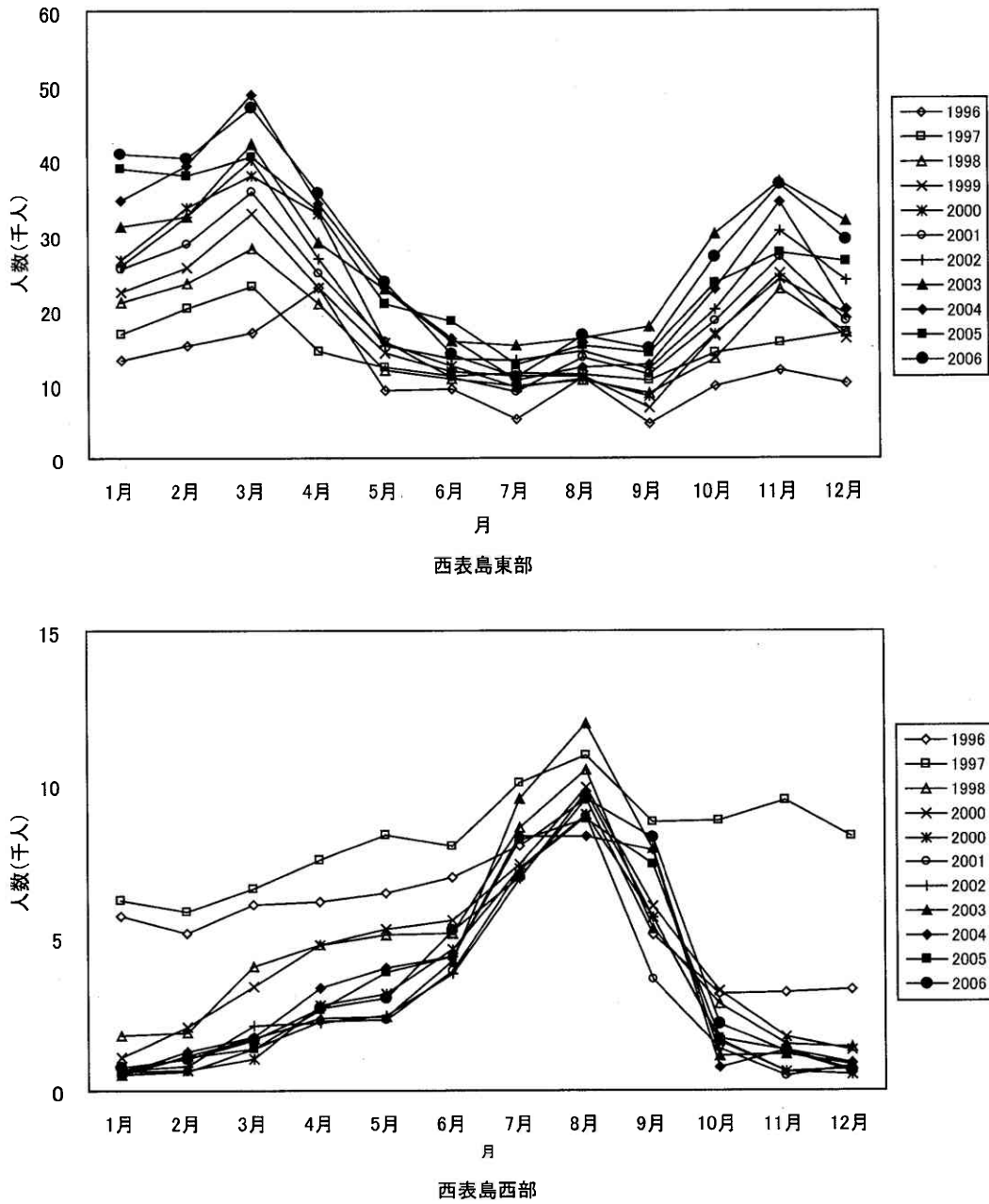


(図2)八重山諸島の観光入域者数

沖縄県・西表島のカヌーツアーについて



(図3) 八重山諸島の月別入域者数
(1996年から2006年)



(図4) 西表島西部地区と東部地区の月別観光入域者数

5-2 カヌーツアーの種類と主なツアーの概要

2004年と2006年の調査期間中に実施されたツアーのうち、両年に共通したコースは

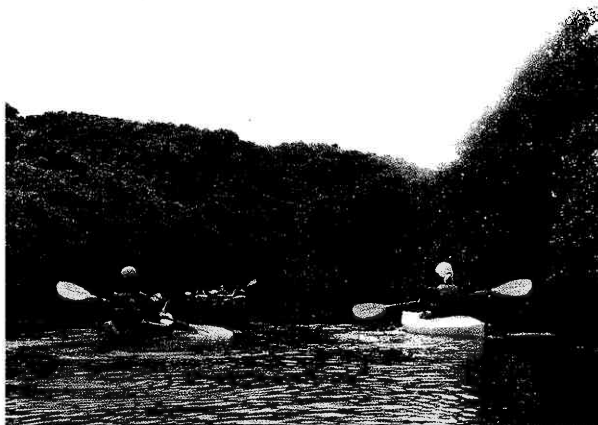
- 1) ピナイサーラの滝一日コース
- 2) ピナイサーラの滝半日コース
- 3) 仲良川コース
- 4) バラス島—鳩間島コース
- 5) 水落の滝—舟浮沿岸コース

の5種類であった。これらは、すべて西表島西部で行われるものであり、④と⑤は、シーカヤックによって海上を航行するツアーである。

これらのコースのうち、2004年と2006年における調査において参加者多かったコースは、ともに1)のピナイサーラの滝一日コースであった。このコースは、沖縄県で最も高い落差約60mのピナイサーラの滝(写真1)の頂上を目指して、マーレ川とヒナイ川をカヌーで、その後山道を徒歩で進むコースであるが、2006年8月23日のスタッフの行動記録を表1に、ツアーの様子を写真2に示す。なお、2番目に参加者の多かったコースは2)のピナイサーラの滝半日コースであるが、このコースでは滝上への登山は省かれ、滝つぼにて昼食を採った後帰路に着き、午後1時過ぎに解散となる。また、ショップ経営者は、ピナイサーラの滝が人気ある理由として、初心者でもマングローブ林やカヌー体験を満喫できること、静かな川や深い森の中を進むため多少の荒天でも実施できることの2点をあげていたが、実際に2006年の調査中には台風の前日にもツアーが実施された。



(写真1) ピナイサーラの滝



(写真2) カヌーツアーの様子

(表1) スタッフの行動記録 (2006年8月23日)

| 時刻 | 内容 |
|-------|---|
| 7:00 | ツアー準備開始 リュックに昼食用の調理器具(皿、はし、包丁、なべ、おたま、ザル)、沖縄そばの食材(だし、調味料、そば、ねぎ、しょうが、三枚肉)救急セット、水筒を詰める。 車にパドルとライフジャケット、カヌーシューズを積み込む。 |
| 7:30 | 朝食をスタッフ全員で食べる |
| 7:50 | 昼食用として参加者およびガイド用の握り飯(紫米を使用したもの)と紫芋ムーチー(餅)を作る |
| 8:30 | 休憩 |
| 9:00 | 車で上原港や民宿に客を迎えに行く |
| 9:20 | 客が事務所に到着 受付、ツアー代金の徴収後、ペットボトルのお茶を1本配布 |
| 9:40 | 車でマーレ川のカヌー置き場まで移動 その途中で車を止め、ドラゴンフルーツやマンゴーの畑を紹介する |
| 9:50 | カヌー置き場近くの駐車場に到着後、その場でカヌーの操船方法を15分程度講習 |
| 10:00 | カヌー置き場まで徒歩にて移動 途中に見られるサキシマスオウノキやサガリバナなどの植物の観察を行う |
| 10:15 | カヌーに乗船し、出発 |
| 10:30 | ヒナイ湾の干潟で一旦下船し、マングローブ、ナレシジミ、ヒモムシ、トビハゼ、ミナミコメツキガニなどの観察を行う |
| 11:00 | 再びカヌーに乗船し、ヒナイ川を進む |
| 11:20 | カヌー停泊場所到着後、徒歩にて滝上に向かってトレッキング開始 途中、動植物の観察を行いながら登山 |
| 12:00 | 滝上到着 スタッフは昼食用の沖縄ソバをつくる この間、客は溪流の水に足を浸したり、滝上からの景色を楽しむ |
| 12:30 | 昼食(沖縄そば、握り飯) |
| 13:00 | 滝上出発 |
| 13:30 | カヌー停泊場所を通過 |
| 14:00 | 滝つぼ到着。 滝つぼで水遊びをしながら軽食(紫芋ムーチー)を採る |
| 14:40 | 滝つぼ出発 |
| 14:55 | カヌー停泊場所出発 |
| 16:10 | 駐車場到着 カヌーの引き上げを行う |
| 16:25 | 事務所到着 客はシャワーを浴びて着替えを行う |
| 16:45 | 車で客を上原港や宿に送る 他のスタッフは、カヌーや機材の手入れを行う |

5-3 ツアー参加者アンケート調査の結果

ピナイサーラの滝一日コース、およびピナイサーラの滝半日コース参加者（家族連れで参加していた小学生以下の子供は除く）を対象として、ツアー終了後に次の5項目に関するアンケート調査を行った。2004年および2006年のアンケート対象人数は、それぞれ62人と134人であった。

〈アンケート項目〉

①参加者のプロフィール

- 性別
- 年齢
- 職業
- 居住地域
- 西表島への来島回数

②今回の旅行について

- 全体の旅行日数
- 西表島滞在日数
- 他島滞在日数
- 旅行形態

③今回のツアーについて

- ツアー利用回数
- 何でこのツアーを知ったか（複数回答可）
- 他のツアーを検討したか
- 選択の決め手(前問「はい」の回答者のみ、複数回答可)

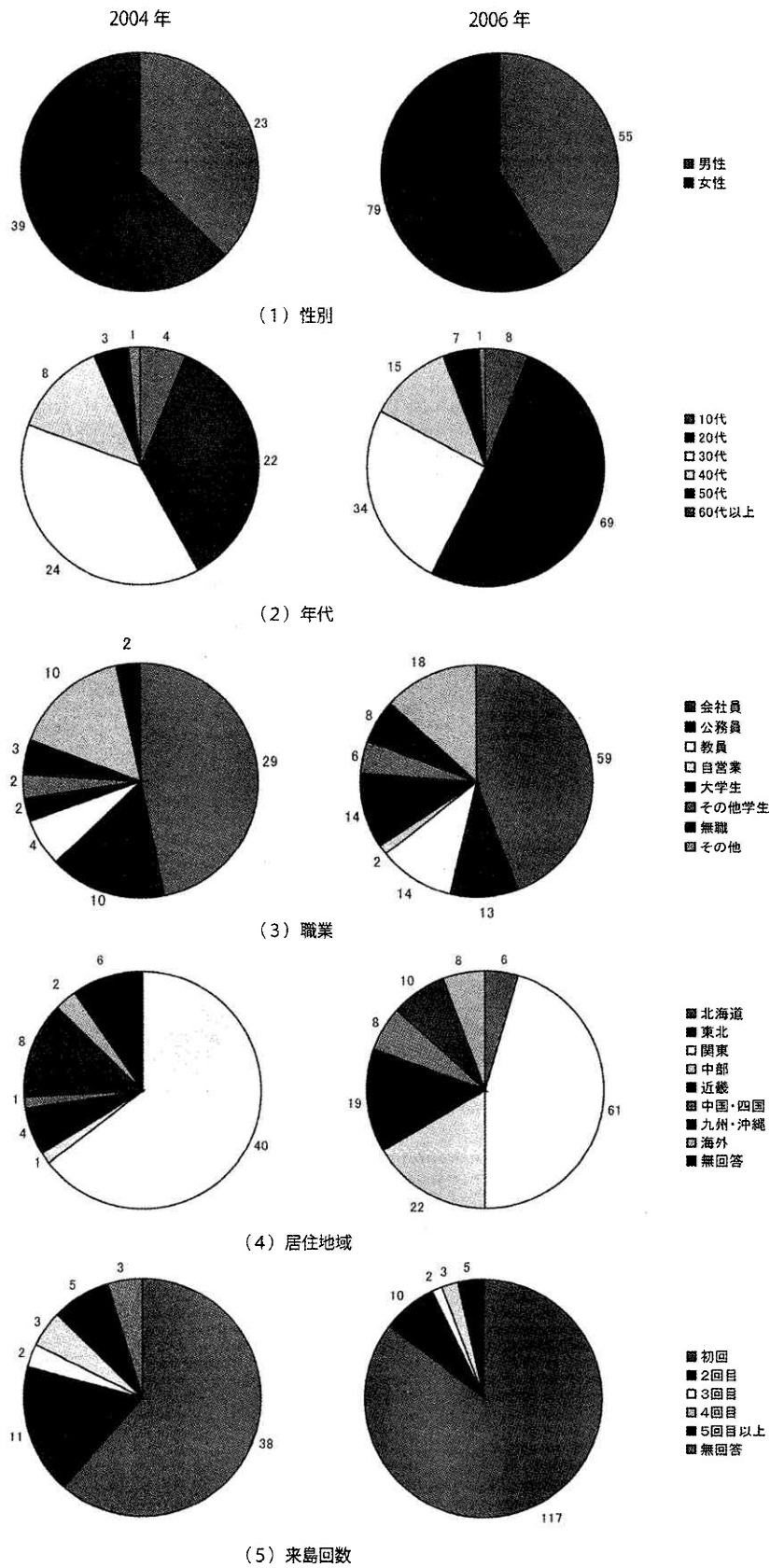
④西表島に関する事前学習について

- 事前学習をしたか
- 事前学習の程度（前問「はい」の回答者のみ、複数回答可）
- 事前学習で興味を持った内容（前々問「はい」の回答者のみ、複数回答可）
- 自然に関する事前学習内容（前問「自然」の回答者のみ、複数回答可）
- 事前学習をしなかった理由

⑤エコツーリズムに関する意識

- エコツーリズムという言葉を知っているか
- 今回のツアーはエコツアーだと思うか（前問「はい」の回答者のみ）
- 西表島エコツーリズム協会を知っているか

2004年と2006年におけるアンケート結果を図5～図9に示す。

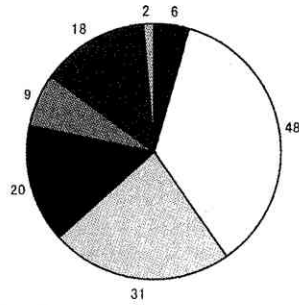
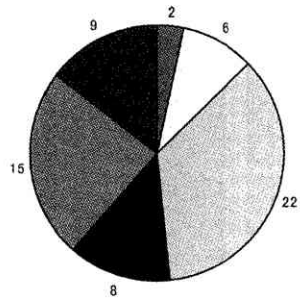


(図5) 参加者のプロフィール

沖縄県・西表島のカヌーツアーについて

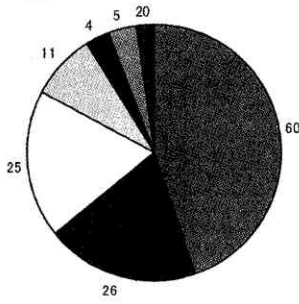
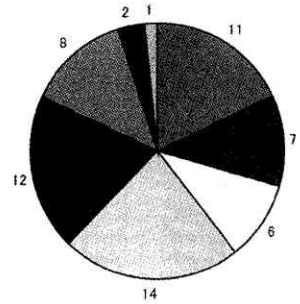
2004年

2006年



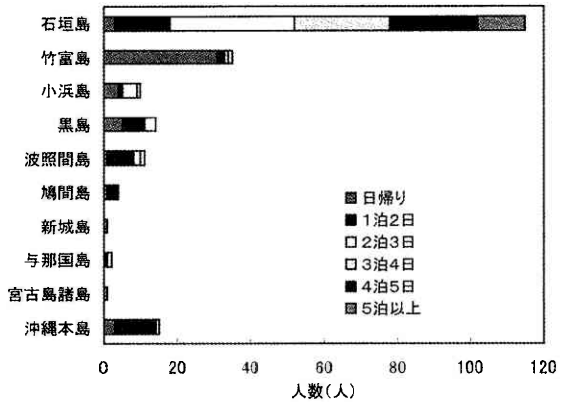
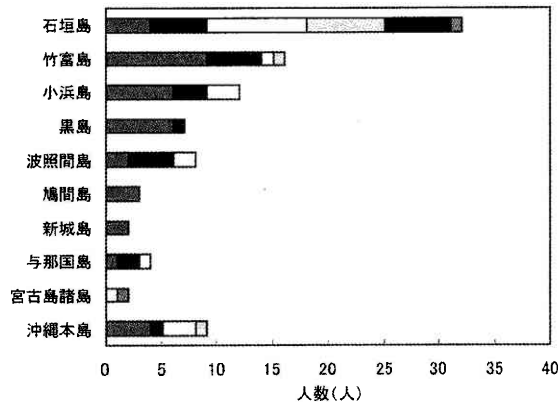
- 1泊2日
- 2泊3日
- 3泊4日
- 4泊5日
- 5泊6日
- 6泊7日
- 7泊以上
- 無回答

(1) 全体の旅行日数



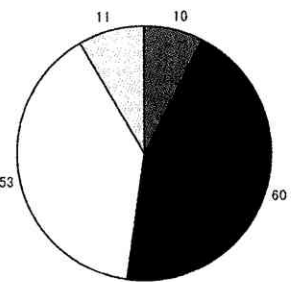
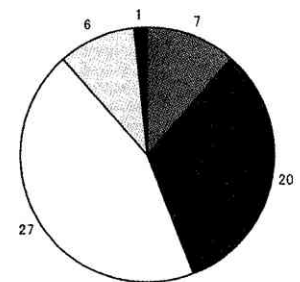
- 日帰り
- 1泊2日
- 2泊3日
- 3泊4日
- 4泊5日
- 5泊6日
- 6泊7日
- 7泊以上
- 無回答

(2) 西表島滞在日数



- 日帰り
- 1泊2日
- 2泊3日
- 3泊4日
- 4泊5日
- 5泊以上

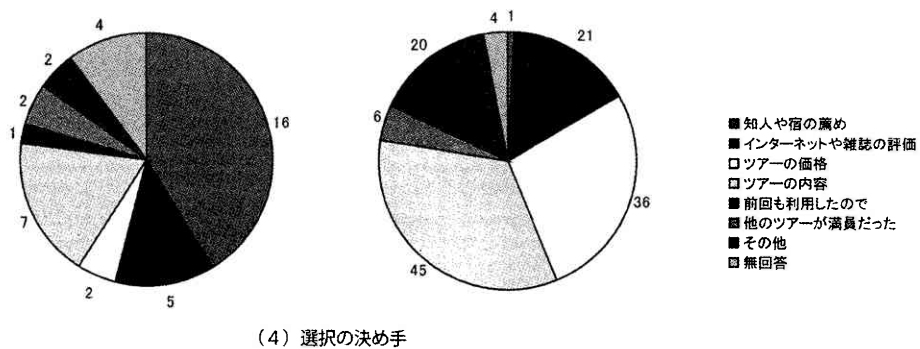
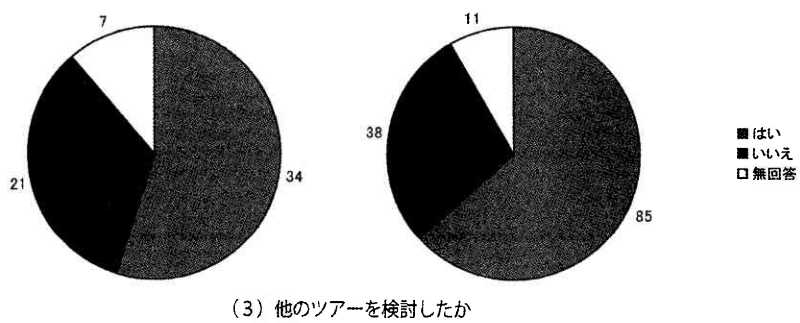
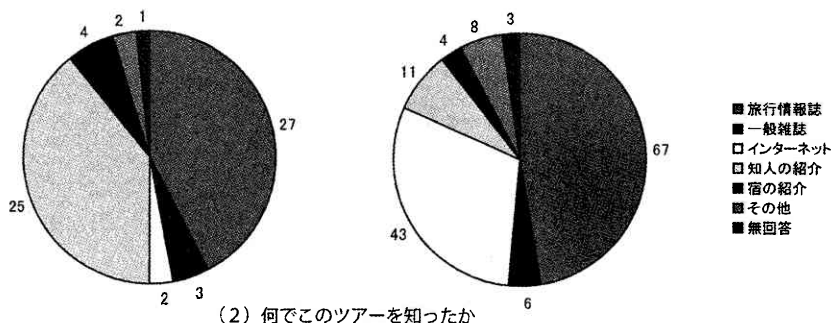
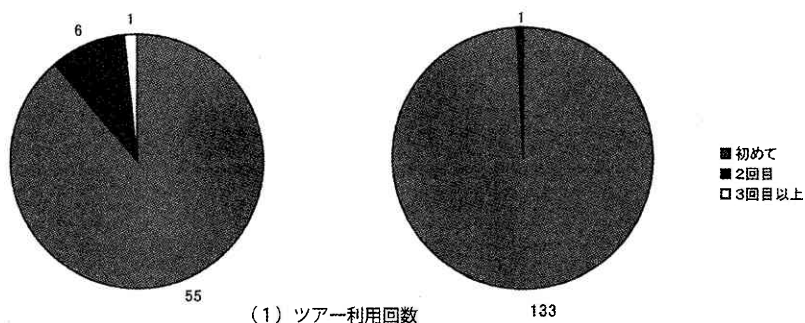
(3) 他島滞在日数



- 一人旅
- 家族旅行
- グループ旅行
- バック旅行
- その他

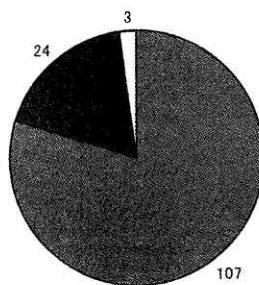
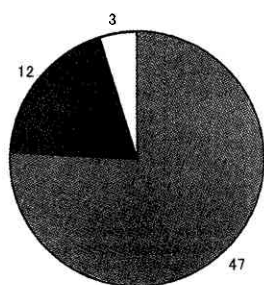
(4) 旅行形態

(図6) 今回の旅行について

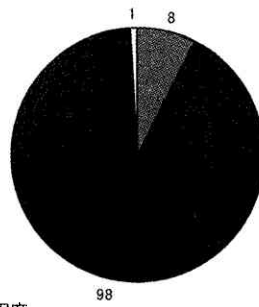
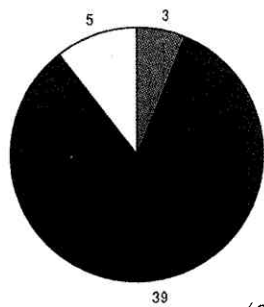


(図7) 今回のツアーについて

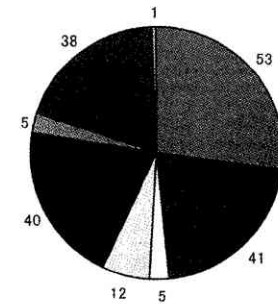
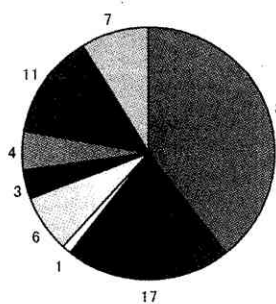
沖縄県・西表島のカヌーツアーについて



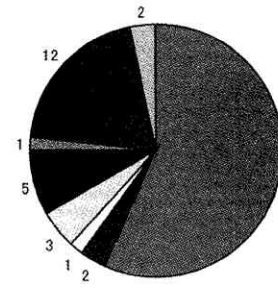
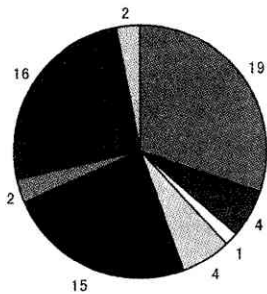
(1) 事前学習をしたか



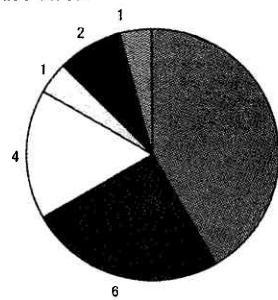
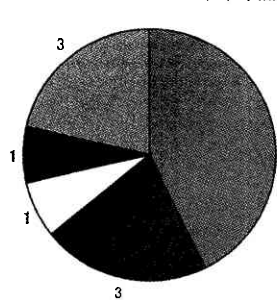
(2) 事前学習の程度



(3) 事前学習で興味を持った内容

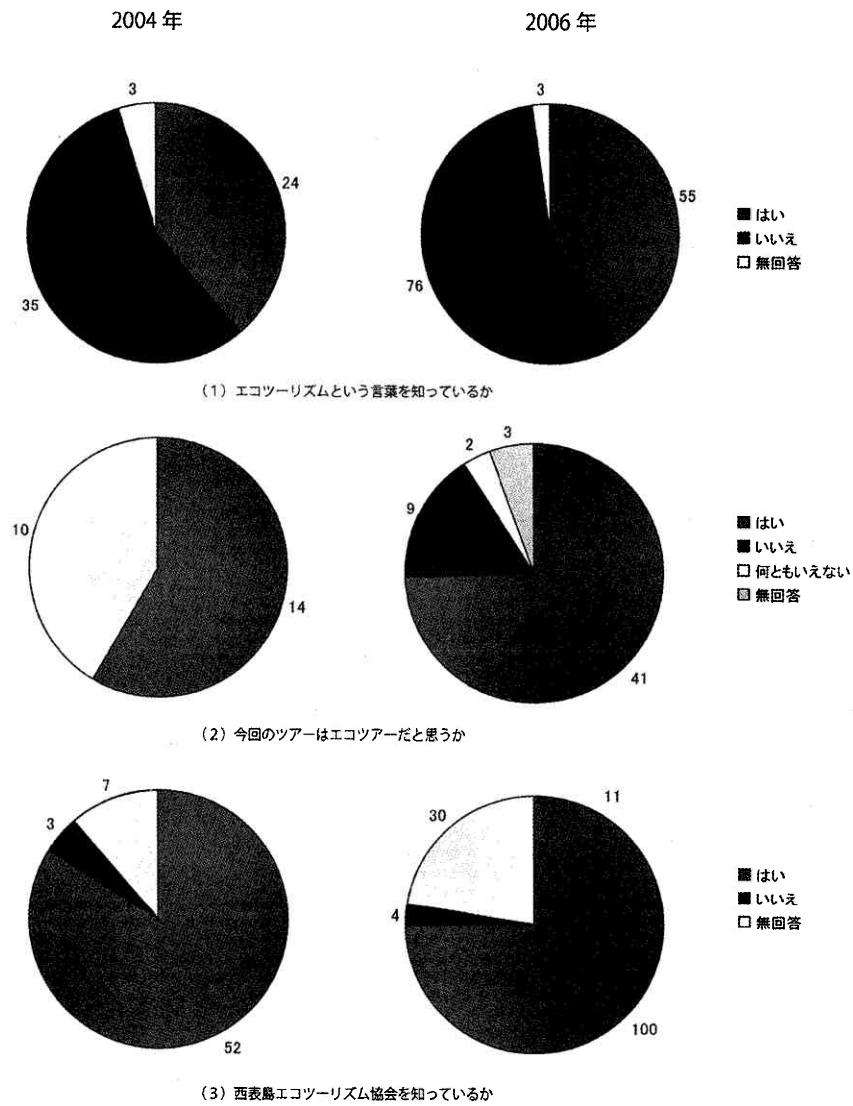


(4) 自然に関する事前学習内容



(5) 事前学習をしなかった理由

(図8) 西表島に関する事前学習について



(図9) エコツーリズムに関する意識

6. 考察

6-1 観光入域者の特徴

八重山諸島全体の観光入域者数は、総数では2006年に初めて100万人を突破し、11年間で250%以上の伸びとなっている。また波照間島と新城島以外の5島では、年を追うごとに入域者が増加していることがわかる。これは近年、テレビによる沖縄を舞台としたドラマや自然を紹介したドキュメンタリーの放映、本土からの移住者による沖縄の暮らしを著した本の出版などのマスコミの影響が大きいと考えられる。さらにそれを背景にした観光業者のツアー商品の増加や、航空会社の安売りチケットキャンペーン、本土への玄関口となる石垣島からの離島航路の整備（高速船による所要時間短縮、便数の増

加)といった要因が考えられる。また竹富島と西表島は、他島に比べ圧倒的に入域者数が多い。竹富島には1987年に伝統的建造物群保存地区に指定された集落、西表島には前述した豊かな自然という観光資源の存在に加え、石垣島からの距離の近さ(竹富島15分、西表島45分)も大きな要因となっていると考えられる。

この2島の次に入域者数が多いのは小浜島であるが、NHKの朝の連続テレビ小説「ちゅらさん」が放映された1992年以降の伸びが顕著であり、テレビドラマによるイメージ作りの影響が大きいことがわかる。鳩間島についても2004年に前年の5倍と急激な入域者数増加が見られるが、小浜島同様、テレビドラマ「瑠璃の島」の影響と考えられる。

月別に入域者数からは、竹富町全体は3月に最大のピークを持ち、冬場の入域者数が夏場を上回っていることがわかる。しかし島別のデータでは、竹富町全体の傾向と同様に冬場の入域者数が夏場を上回る「冬場型」と、その逆である「夏場型」があることがわかる。前者は竹富島、西表島、小浜島、後者は黒島、波照間島、鳩間島、新城島である。この結果から、冬場型の島は石垣島からの距離が近く、夏場型の島は石垣島からの距離が遠いことがわかる。

一方、西表島の西部地区と東部地区の入域者数データは興味深い。入域者総数は東部地区の方が多いが、グラフよりこの11年間において、東部地区は冬場型、西部地区は夏場型の傾向が年を追うごとに強まってきていることがわかる。この理由としては、冬場は西表島北側の海が荒れるため、石垣島からの船便が西部の上原港に入港できない日が多いこと、レンタカーやバスツアーの増加により東部から西部への陸路によるアクセスが便利になったことが考えられる。また西部では、1998年以降、8月をピークとした夏型が強まっていることがわかる。

6-2 ツアー参加者アンケート調査の分析

6-2-1 参加者のプロフィール

参加者の性別については、2004年、2006年ともに女性が男性を上回っていた。また年齢については、ともに20代と30代で全体の約3/4を占めており、特に2006年の調査では、20代が半分以上を占めていた。性別と年齢との関係は、両年とも20代は女性が多く、30代以上は男性の方が多いことがわかった。10代の参加者については、すべて親と一緒に参加していた小・中学生であった。なお2004年には70代、2006年には60代の高齢者も1名ずつであるがツアーに参加していた。

職業については、両年とも会社員、公務員、教員といった勤め人が約2/3を占めていた一方で、自営業は2人ずつという結果であった。

参加者の居住地域については、両年とも関東が最も多く、2004年では約2/3を占めていた。特に東京からの参加者が顕著で、2004年では62人中24人、2006年では134人中

35人であった。この傾向については、東京に住む人の「自然に対する憧憬の強さ」を表すものという考え方もできるが、東京—沖縄間の航空便の数や長期休暇が比較的取りやすい規模の大きな企業が多いことなども考えられる。2006年の結果では、中部、関西からの旅行者も増加していたが、その合計は関東からの旅行者の半数で全体の約1/3占めるにすぎない。また2004年にはアメリカからの参加者（日本人）が2名、2006年には北海道からの参加者が6名いた。

西表島への来島回数は、両年とも「初めて」という者が過半数を占めており、特に2006年では全体の8割近くを占めていた。

6-2-2 今回の旅行について

全体の旅行日数では、2004年では4泊5日が22人と最も多く、次に6泊7日が15人であった。2006年では3泊4日が49人と最も多く、次に4泊5日が30人であった。西表島滞在日数では、日帰りと回答した者が2004年では62人中11人であったのに対し、2006年では132人中60人と約半数を占めるほどに増加していた。また「西表島に宿泊する」と回答した者についても2004年では3泊以上が37人と過半数を占めたが、2006年の調査では調査件数が倍以上であったにもかかわらず23名と減少していた。この点については、日帰りの旅行者のうちの52人が初めての来島と回答しており、西表島へはカヌーツアーのみを目的とした来島者が増加しつつあること、また調査を行ったカヌーツアーのショップが西表島西部地区にあり、この地区の観光入域者数がピークを迎える8月に民宿などの宿泊施設が確保しにくいことが考えられる。

一方、少数ながら10泊以上の滞在者もおり、中には「未定であるが1ヵ月以上は滞在する」と話していた者もいた。このような者の職業は、学生とその他（フリーター）に限られていた。2004年の調査において、全体の旅行日数が1泊2日と2泊3日と回答した者の居住地は沖縄県であったが、2006年の調査においては、関東（東京）と中部（愛知）からの2泊3日という短期旅行者もいた。

他島滞在日数については、両年とも2泊以上滞在する島としては石垣島が圧倒的に多く、八重山観光の拠点が石垣島であることが改めて確認できる。また2004年と比較した場合、2006年には竹富島への日帰り観光が急増していることがわかる。全体の旅行日数の増加と西表島の滞在日数には相関関係は見られず、全体の旅行日数が7泊以上の者でも3泊目を境に他の島へ移動する者が多いことがわかった。

旅行形態については、両年ともに友達同士や職場仲間、カップルといったグループ旅行が最も多く、グループの人数としては2人が最も多かった。次に多いものは家族旅行で、グループ旅行と合わせると全体の3/4以上となっている。一方、1人旅と回答した者には西表島に比較的長期滞在する者が多いことがわかった。例えば2006年では4泊

5日が1人、5泊6日が3人、6泊日、8泊9日、10泊11日、13泊14日が1人ずつであった。

6-2-3 今回のツアーについて

ツアー利用回数については、2004年に村田自然塾で行った調査では、62人中「初めて」と回答した者が55人で約9割を占めていたが、「2回目」が6人、4回目が1人といわゆる「リピーター」もいることがわかった。2回目の利用者は、西表島の来島回数に対しても2回目と回答しており、村田自然塾を連続して利用した理由として「前回のツアーの印象が非常に良かった」ということをあげていた。また6人の内3人がピナイサーラの滝1日コースに2回参加していた。一方、2006年に風車で行った調査では、134人中133人が「初めて」と回答していた。複数回利用者は、2回目が1人のみであったが、「初めて」という回答者の中には前日に異なるコースのツアーに参加していた者もいた。

「何でこのツアーを知ったか」については、両年ともに旅行雑誌という回答が最も多かった。八重山諸島関連の旅行雑誌としては、離島情報、やえやま GUIDE BOOK、るるぶなど数種類が発行されており、各誌ともに交通情報、宿、ツアーショップなどが総合的に紹介されているため、旅行者にとっては1冊で旅行のスケジュールを組むことが可能である。村田自然塾と風車は、すべての旅行雑誌にツアー内容が詳細に紹介されていた。また他のツアーを検討したかという問いに対し、両年ともに「はい」と回答した者が大半を占め、選択の決め手についても「雑誌の評判がよかった」という回答が見られたことから、旅行雑誌で紹介されることは業者にとって集客の有効な手段であると言える。

村田自然塾の場合、選択の決め手について「知人や宿の人に勧められた」という回答が最も多かった。これは村田氏が古くからガイド業を営んでおり、民宿経営者とも付き合いが深いことが関係していると考えられる。一方、風車の場合は「何でこのツアーを知ったか」について、雑誌の次にインターネットが多かった。風車は自前のホームページを持っており、調査年度にはホームページを持たなかった村田自然塾との違いが出たと考えられる。ホームページはキーワード検索によってたやすく情報を探すことができ、またツアーに参加した人がショップの紹介や評価などを自分のホームページに書き込んでいるケースも多い。さらに自分のホームページにショップのホームページへのリンクを張ることも多いため、インターネットは業者にとって集客のための有効な手段であろう。

6-2-4 西表島に関する事前学習について

「西表島についての下調べをしたか」という質問に対しては、両年ともに「はい」と回答した者が「いいえ」と回答した者を大きく上回っていた。しかし「どの程度調べたか」については「簡単に」が圧倒的に多く、「かなり詳しく」という回答はその1/10程度であった。簡単に調べたというのは、旅行雑誌やガイドブックを読んだ、あるいはホームページを見た程度であろうと考えられる。「下調べをしなかった理由」については「時間がなかった」という回答が多かったが、「グループの友人に任せたので」、「必要と思わなかった」という回答もあった。3章で述べたように、多くのエコツーリズム団体が示すエコツーリズムの定義には「教育的・解説的な要素を含んだ活動」が入れられている。これは西表島のカヌーツアーにおいてガイドを「教師」、参加者を「西表島の自然などを学ぶ学生」と考えた場合、参加者にとって予習の有無が見聞した内容をより深く理解するのに役立つことは間違いない。しかしながら、両年の調査結果を見る限りでは事前学習のレベルは低く、西表島のカヌーツアーも従来の観光スタイルである「珍しいモノを見る」という体験的ツアーと何ら変わるところはない。また「その他」という回答の中には、「急にツアーの参加を決めたから」というものもあった。2006年の調査では、前日に予約が入ることも多く、西表島に到着してから民宿の人や同宿者に勧められて、ツアーへの参加を急遽決める人も多いと考えられる。

「下調べをした」と回答した者に対する「何について調べたか」という質問では、「自然」という回答が最も多く、その内容の多くは動物（哺乳類）、植物、魚類であった、特に2006年の調査では哺乳類という回答が非常に多かった。もちろんこの哺乳類は、イリオモテヤマネコであるが、ツアー終了後のヒアリングで「イリオモテヤマネコを見ることができると思って来たのに、見ることができず不満が残った」と述べた者も少なからずいた。イリオモテヤマネコは絶滅が危惧されているほどの希少動物であり、このようなツアーにおいて遭遇することはほぼ不可能であるにもかかわらず、西表島に行けば動物園のように珍しい動物を見ることができると考え、ツアーに参加していると思われる。ただしマングローブ、サキシマスオウノキなどの植物、キノボリトカゲ、ミナミコメツキガニなど西表島特有の自然を見ることができたことについては、全員が印象に残ったと述べていた。キノボリトカゲやミナミコメツキガニは、ツアーコース周辺に多く生息し、ほぼ確実に姿を見ることができると考えられる生物である。

6-2-5 エコツーリズムに関して

「エコツーリズムという言葉を知っているか」という質問に対しては、両年とも「知らない」という回答の方が多かったが、「知っている」と回答した者に対する「今回のツアーはエコツーリズムだと思うか」という質問については、2004年では半数以上が、

また2006年には3/4が「思う」と回答していた。

「エコツーリズムだと思う」理由について、ヒアリングにおいては「動力船を使わず、カヌーを使うから」という意見が多く聞かれた。わが国では、カヌーは20年ほど前からアウトドア雑誌で紹介されるようになり、手軽な水辺のスポーツとして広がっていった。西表島のカヌーツアー参加者の中では、エコツーリズムという言葉の認知度は低い、その言葉を知っている者にとっては、「人力で漕ぐのでカヌーツアー＝エコツアー」という認識が持たれているものと思われる。一方、「そう思わない」理由としては、「人が多く環境保全に考慮していない」というものが多かった。西表島のカヌーツアーは、1990年代から開始され、2000年以降急激に業者数が増加し、2006年では全島で40以上あるといわれている。このようなカヌーツアーを行う業者の増加には、次のような要因が考えられる。

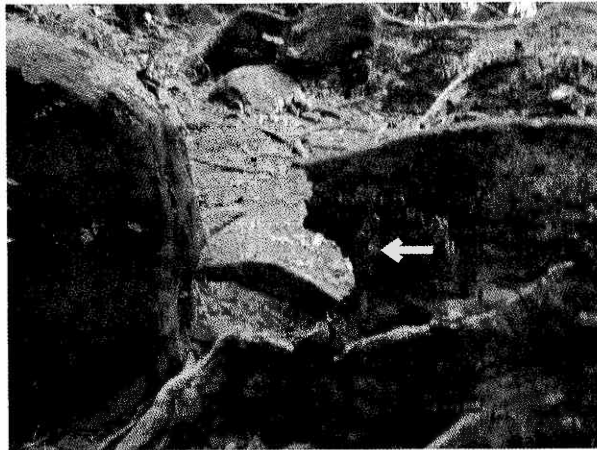
- ①西表島には亜熱帯林を流れる約40の河川があるが、そのうちの10本ほどは、川幅が広く緩やかな流れの部分が長く続く。また川辺にはマングローブや亜熱帯の植物が多く茂っており、様々な生物の住処にもなっている。カヌーを使用すればそれらの動植物にたやすく接近することができるため、カヌーツアーに適した環境が整っている。
- ②カヌーには船舶の操縦免許も不要である。またカヌーショップの開業に関しては、特に行政の認許などの手続きも不要である。
- ③カヌーは、静かな水面では非常に安定性が高く、初心者でも扱いやすいことが利点である。カヌー1艘の価格も川で使用するオープンデッキ型が10万円前後、海で使用するシーカヤックでも20万円程度であり、動力船と比べるとメンテナンスも楽で、港に係留する必要もない。サイズも長さ2人乗りのものでも4m程度であり保管スペースも車のガレージ程度ですむ。したがって資金が少ない人でもカヌーツアーを開業しやすい。

特に①に述べたカヌーに適した河川は、今回調査したピナイサーラの滝に向かうマーレ川、ヒナイ川以外にもナカラ川、クイラ川、浦内川、西田川と西表島西部に多く、カヌー業者の多くも西表島西部の集落にショップを開いている。したがって西表島全体の観光入域者数は冬場型であるにもかかわらず、西表西部については夏場型である理由についても、カヌーツアーが大きく関わっていると考えられる。すなわち「水に親しむ」タイプのカヌーツアーは夏のイベントであり、両年の調査で大半を占めた日帰りの客が夏場にはカヌー業者が多い西表島西部に入域するのであろう。

興味深いことに本調査に協力をいただいた村田自然塾の村田氏と風車の大谷氏は、ともに自分のショップで主催しているカヌーツアーについて「エコツーリズムであるとは

思っていない」という意見を持っている。その根拠として、次のような点を上げている。

- ①カヌーツアー業者はカヌー組合を作って、1日のピナイサーラの滝コースの入域者数を「ガイド1人に付き参加者8人」と自主制限しているが、入域可能な業者数自体は制限されていない。またこの組合は任意団体であり、全業者が加入しているとは限らない。
- ②カヌー係留場所から滝まで徒歩で行く山道にサキシマスオウの板根が露出している部分があるが、この板根を踏みつけてゆく参加者も多く、痛みがひどい（写真3、矢印の部分）。またピナイサーラの滝の滝壺での遊泳もコースに含まれているが、滝壺の岩に参加者の体に塗られた日焼け止めクリームが付着したり、いたずら書きがされている。このようなことを気にしない参加者や注意しないガイドがいる。
- ③自分たちを含め、ほとんどの業者がツアーに使用するカヌーをツアー発着場であるマーレ川岸周辺の林の中に放置している。



(写真3) 破損されたサキシマスオウノキの板根

7. まとめ

2004年と2006年に西表島においてカヌーツアー参加者に対する意識調査を行った。西表島は、我が国で初めてエコツーリズム協会が設立された場所であるが、参加者にはエコツーリズムという言葉がまだ浸透しておらず、言葉を知っている者にも、「訪問先の自然環境を破壊することなく、その土地特有の自然・生活文化などの資源を持続させていくような旅行の概念」というものは持たれていないことがわかった。またカヌーツアー参加者の多くが石垣島からの日帰り客であるため、ツアー業者以外、例えば民宿や食堂などには立ち寄ることもないことから、「地域への経済還元を同時に成立させる新しい旅」という点についても疑問が残る。したがって、皮肉にも調査したショップ経営

者自らも述べてもいることではあるが、現時点で西表島のカヌーツアーにはエコツーリズムの原則として多くのエコツーリズム団体が定義する要素を完全に満たすものとは言えないと結論できる。

注1) 1637年に、宮古・八重山地方にかけられた税制で、役人や身障者以外の15歳から50歳までの男女に、田畑の面積とは関係なく頭割りに税を課するというものであった。税は主に米や布で納められたが、稲作することが出来ない島の住人は、他の島まで出かけて稲作を行っていた。

注2) 琉球政府が行った大規模な開墾政策のことで、人口過剰の島々から一定数の人々を未開墾地や過疎地域へ強制移住させ、開墾に当たらせた。

【参考文献】

- 1) 三木 健：西表炭坑概史、ひるぎ社（1983）
- 2) スー・ビートン：エコツーリズム教本 先進国オーストラリアに学ぶ実践ガイド、平凡社、pp 18（2002）
- 3) スー・ビートン：エコツーリズム教本 先進国オーストラリアに学ぶ実践ガイド、平凡社、pp 22（2002）
- 4) 平成11年度沖縄地域問題研究会：対米協研究シリーズNo.3 沖縄型エコツーリズムの試み、（社）沖縄県対米請求権事業協会、pp 89（2000）
- 5) 平成11年度沖縄地域問題研究会：対米協研究シリーズNo.3 沖縄型エコツーリズムの試み、（社）沖縄県対米請求権事業協会、pp 90（2000）
- 6) 吉田春生：エコツーリズムとマスツーリズム—現代観光の実像と課題—、大明堂、pp 13-14（2003）
- 7) 自然環境研究センター：ヤマナ・カーラ・スナ・ピトゥ 西表島エコツーリズムガイドブック、西表島エコツーリズム協会（1994）
- 8) 吉田春生：エコツーリズムとマスツーリズム—現代観光の実像と課題—、大明堂、pp 34-35、（2003）